

看護学生の看護学臨地実習前における適応感 ——実習前適応感尺度の作成と検討——¹⁾

龔 恵芳*

Nursing Students' Sense of Pre-Practicum Adaptation in Nursing Clinical Practicum:
Creation and Examination of the Sense of Pre-Practicum Adaptability Scale

Keihou KOU*

The purpose of this study was to develop a scale of nursing students' sense of pre-practicum adaptation in nursing clinical practicum and to examine factors associated with the sense of pre-practicum adaptation. A total of 357 pre-practicum nursing students participated in the study. As a result of factor analysis of the created pre-practicum adaptation scale, three factors were extracted: "mental urgency," "immediate support," and "awareness of purposeful goals". The reliability and validity of the scale were examined, and it was judged to be a usable scale with a certain degree of quality assurance. The results of examining factors related to the nursing students' sense of pre-practicum adaptation suggested that the scale was particularly related to the nursing students' depressive symptoms.

key words: nursing students, nursing clinical practicum, sense of pre-practicum adaptation

問 題

多様化・複雑化する医療ニーズに応えることができる看護師の役割への期待は大きいことから、看護師免許を取得してからではなく、看護基礎教育の時から看護実践能力を身に付けていくことが重要である。看護基礎教育の特徴は実習科目の比重が多いところである。看護学臨地実習(以下、実習とする)は目の前で行われている看護の実践を自ら体験しながら学べることから、看護実践能力を身に付けられる

貴重な学修場である。このことは、実習は看護学を学ぶ上で特に重要な科目として位置付けられていることから明らかである(Chan et al., 2018; Lee et al., 2018)。

しかし、2022年度看護師等学校養成所入学状況および卒業生就業状況調査によると(厚生労働省, 2022)、入学者数と卒業者数の割合は3年課程で約90%、大学で約95%であり、一定数の退学者が存在する。このことに関して高下他(2018)は、退学した学生の特徴として「学業へのついていけなさ」将来

¹⁾ 研究にご協力頂きました皆様にご心より御礼申し上げます。また、本論文を執筆するにあたりご指導いただきました関西大学社会学部教授脇田貴文先生に深謝いたします。本研究は2020年度日本私立学校振興・共済事業団の女性研究者奨励金による援助を受け実施している。

* 関西大学大学院心理学研究科

Graduate School of Psychology, Kansai University, 3-3-35 Yamate-cho, Suita-shi, Osaka 564-8680, Japan.
(k664157@kansai-u.ac.jp)

への不安「自分自身への自信のなさ」「自己開示の苦しさ」「他者と関わることの苦しさ」を抱える傾向にあることを報告している。また、Bakker et al. (2019)は、退学理由の一つとして実習への適応の難しさであることを示している。

実習で看護の対象となる患者は多様であり、学生であっても生命に直結する対象を受け持つことから、様々な視点からのアセスメントや臨機応変な行動、スキルが求められる。また、学生の受け持ち対象者によって個々に求められる内容も異なるため、能動的に学ぶ姿勢も求められる。よって、実習は授業のように計画通りに進まないことが多く、初学者である学生にとってはハードルが高い。現実には、実習を楽しむにしている学生もいるが、一部では実習が近づくにつれて心身の不調が出現し、臨地へ行く前から実習への適応が難しくなる学生が見受けられる。

適応に関しては、主観的適応を意味する「適応感」の概念があり、心理学分野や教育分野においても研究がなされている。「適応感」について、谷井・上地 (1994)は、適応そのものを意味する概念ではないが、個人の一指標として捉えることができ、適応感を規定するものは個人と環境との主観的な関係であると定義している。また、大久保・青柳 (2003)は、「個人が環境と適合(フィット)していると意識すること」と定義している。つまり、適応感は個人が環境の中で上手く生活しているという、個人的、主観的な認知であるといえる。

看護基礎教育においては、実習適応感と個人要因の関係についての研究がなされている。吉永他 (1989)は、自我同一性の中でも社会性確立と実習適応感に関連があり、高橋他 (2006b)は、社会的スキルの中でも「初歩的なスキル」「計画のスキル」を獲得している学生ほど実習適応感が高く、学生の実習適応感は周囲との関係性に影響を受けていることを示唆している(財津他, 2019)。これらの実習適応感の研究は実習中のものが多いが、龔 (2020)は学生の実習適応感に影響する要因には「学生が考える将来の目標と実習に対する意味付け」「学生が感じた実習のリアリティ」「学生が求める人的資源」があり、実習前から関係していることを示唆している。

学生にとって実習前の学修場は学校であり、実習中は臨地が中心となるため、学習環境は大きく異なる。香川・茂呂 (2006)は学内演習と実習では異時間

性があるとし、櫻井他 (2018)は実習直前における学生の状態不安が高いことを示唆している。これらから実習では知識だけでなく、技術や周りとの協調性も求められ、また、受け持ち対象者の存在、指導者の存在、他の学生との比較など大きなプレッシャーがかかる。実習で技術が上手くできない状況と類似した状況として、スポーツ分野において外部からのプレッシャーや自分の心の中で生じるプレッシャーによってパフォーマンスを妨げる心理的要因の1つとしてイップスと呼ばれる運動障がいがある (Clarke et al., 2015)。実習とスポーツを一概に比較はできないが、イップスのように実習においても自分のおかれた状況にうまく適応できず、様々な心身症状が出現する可能性も高い。

また、近年は COVID-19 の影響による実習内容の直前の変更、感染対策の強化など実習施設の規制が大きく、見通しが立たないことも多いことから、学生は実習前から想像し難い思いを抱いていると考えられる。これらを踏まえると、実習前に焦点を当て学生の実習適応感を検討することは学生支援の一つとして有用であると考えられる。

実習は8つの領域 (基礎看護学・地域在宅看護論・成人看護学・老年看護学・小児看護学・母性看護学・精神看護学・看護の統合と実践)があり、全ての実習単位を取得する必要がある。実習の具体的な方法に関しては各学校に委ねられているが、一般的には、初期に「基礎看護学実習」、次に「地域在宅看護論実習・成人看護学実習・老年看護学実習・小児看護学実習・母性看護学実習・精神看護学実習」、最後に総括として「看護の統合と実践実習」を3年課程であれば3年、大学であれば4年にかけて順次行われる。Watson et al. (2009)は、初期に行われる実習について学生の心理的苦痛は大きく、Sun et al. (2016)は、実習の不安は特に心身に影響しやすいと示唆していることから、実習の進捗と学生の実習前の適応感に関連があるのではないかと考えられる。

実習適応感の定義については、実習は学生が主体となって経験する場であることから龔 (2020)の実習適応感の定義である「学生が実習環境と適応していると意識すること」を参考とする。また、実習前とは「実習において学生が臨地に行く1週間前から前日までの期間」とする。そこで、実習前の適応感の定義を「これから行く実習において、学生が実習前の期間

を適応していると意識すること」とする。

以上から、学生の実習前における適応感を把握することは、学生にとっては、自己の実習前における適応感を知るきっかけに役立ち、教員にとっては、学習成績では見えない学生の心理面の把握につながり、学生支援の方略を具現化していく一助になると考えられる。そこで、本研究では実習開始前の適応感に焦点を当て、①実習前適応感尺度の作成および信頼性・妥当性、②実習前適応感に影響する要因の検討を行う。

方 法

調査期間

2019年1月から2020年10月に実施した。

調査対象者

看護基礎教育機関(6校)に在籍している学生990名を対象とした。

調査方法

学生が実習に行く1週間前から1日前のいずれかの日に、Web(CREATIVE SURVEY)を用いたアンケート調査を行った。

実習前適応感尺度の信頼性・妥当性

実習前適応感尺度の作成 実習前適応感尺度の作成については、以下の①から⑤のステップを踏んで行った。①龔(2020)が実施した実習前適応感に与える影響のインタビュー調査の発語内容と、既存の適応感に関係する尺度(大久保, 2005; 高橋他, 2006a)を参考に項目を選定した。②①のステップを看護師1名と心理計量学を専門とし質的調査の経験を有する大学教員1名との議論を重ねた。内的妥当性を検討するため、③②で試案した項目を看護師1名と看護学部の大学教員2名で確認を行い、④③で試案した項目を看護師1名と全ての実習を終了した学生4年生2名で確認を行った。⑤最終的に考案した項目を看護師1名と心理計量学を専門とし質的調査の経験を有する大学教員1名で内容を確認し、実習前適応感尺度18項目を作成した。

実習前適応感尺度の回答法は5件法(5とてもあてはまる, 4ある程度あてはまる, 3ややあてはまる, 2どちらにもあてはまらない, 1あてはまらない)であり、得点が高いほど適応感が高いことを示す。質問の教示については「実習1週間前から1日前のあなたのことについてお答えください」として回答を求

めた。

実習前適応感尺度の妥当性検討のための使用尺度 実習前適応感尺度の基準関連妥当性を検討する尺度として、看護基礎教育の実習における学生の自己効力感尺度(以下、自己効力感尺度とする)(眞鍋他, 2007)とCES-D(The Center for Epidemiologic Studies Depression Scale)日本語版20項目(以下、CES-Dとする)(島他, 1985)を用いた。自己効力感尺度は16項目3因子「対象の理解・援助効力感」「友人との関係性の維持効力感」「指導者との関係性の維持・学習姿勢効力感」からなる尺度であり、回答法は6件法(1全くできないと思う~6かなりよくできると思う)である。本尺度を用いた理由は、看護基礎教育での実習に焦点が当てられ、学生の自己効力感が実習への心理的適応に関係することが示唆されているからである。CES-Dは60点満点で評価され、カットオフ値の16点以上がうつ状態を疑っていくラインとなる。本尺度を用いた理由は、尺度の妥当性や臨床的有用性が確認されており、質問項目も20問と少なく簡便に使用できること、諸外国に比べて日本は実習において不安からうつ病の罹患率が高いことが示されているからである(Tung et al., 2018)。

実習前適応感に影響する要因

実習前適応感に影響する要因については、①学生の抑うつ症状、②学生が抱く実習への重要性、③実習期間、④実習領域の4つを用いた。①学生のうつ症状については、実習前適応感尺度の妥当性の検討で用いたCES-Dを使用し、学生の抑うつ症状の有無と実習前適応感の関連を検討する。日本の学生は実習の不安からうつ病の罹患率が高いことから(Tung et al., 2018)、実習前においても学生の抑うつ症状があるほど適応感が低いと考えられる。②学生が抱く実習への重要性を用いた理由は、学生は看護技術と知識を学ぶ場として実習が重要であると認識しているからである(Chan, 2001)。よって、実習前においても学生が実習を重要と思っているほど適応感が高いと考えられる。本研究では学生が抱く重要性を3つ〈全く重要と思わない/あまり重要と思わない/やや重要と思う〉〈ある程度重要と思う〉〈とても重要と思う〉に分類し、実習前適応感との関連を検討する。③実習期間を用いた理由は、学生が新しい実習場に適応するには一定の時間がかかり(厚生労働省, 2011)、実習期間が6週間以内よりも7週間以上のほうが学

生の満足度が高く、指導者との関係も築きやすいからである (Warne et al., 2010)。よって、実習前においても実習期間によって適応感に違いがあるのではないかと考える。そこで、実習期間を3つの期間(1週間)〈2週間〉〈3週間以上〉に分類し、実習前適応感との関連を検討する。④実習領域を用いた理由は、初期に行われる実習のほうが学生の心理的苦痛が大きいからである (Watson et al., 2009)。一般的に実習の順序は、初めに基礎看護学実習、最後に看護の統合と実践実習に設定されている。そこで8つの領域を3つ「基礎看護学実習(以下、基礎実習とする)」「地域在宅看護論実習・成人看護学実習・老年看護学実習・小児看護学実習・母性看護学実習・精神看護学実習(以下、領域実習とする)」「看護の統合と実践実習(以下、統合実習とする)」に分類し、実習前適応感との関連について検討する。

倫理的配慮

研究計画書を関西大学大学院心理学研究科の研究・教育倫理委員会の承認を受け実施した【承認番号#110】。また、研究協力機関には関西大学大学院心理学研究科の研究・教育倫理委員会の結果を提示し、同意を得た。研究協力機関の責任者および研究対象者に対する説明は、研究の主旨、参加の自由意思の尊重、不参加でも不利益がないこと、プライバシーの保護などについて口頭および文章により行った。

結 果

本研究では実習開始前に焦点を当て、①実習前適応感尺度の作成および信頼性・妥当性について、②実習前適応感に影響する要因についての検討を行う。

対象者の属性

看護基礎教育機関に在籍している学生990名を対象に調査を行った。回答数は357名(回収率36%)であった。内訳は、性別が女性329名、男性が28名、学年が1年生51名、2年生215名、3年生91名、4年生0名、平均年齢(標準偏差)は23.71(6.38)歳であった。

実習前適応感尺度の信頼性・妥当性

実習前適応感尺度18項目の各項目について項目分析を行うため因子分析(最小残差法, oblimin 回転)を行った。その結果、固有値の減衰状況は4.51, 2.56, 1.65, 1.25, 1.00, 0.91, …であり、最大因子数

は5、スクリー基準からは4因子を抽出することが妥当であると考えられた。平行分析の結果からは3因子の抽出を示唆していた。以上から抽出する因子数を3として分析を進めた。

3つの因子を抽出する因子分析(最小残差法, oblimin 回転)を行った結果、項目2, 4, 10, 11, 14, 15は複数因子に高く負荷していたため、これらを削除しつつ因子分析を繰り返した。Table 1に最終的な因子分析結果を示す。また、因子間相関は.19~.29であり、回転後の累積寄与率は.46であった。

第1因子は6項目で構成されており、「実習のことを考えると精神的に余裕がなくなる」「実習がとても不安である」などの項目が高い負荷量を示していた。そこで[F1:精神的な切迫]と命名した。第2因子は3項目で構成されており、「頼れる人が身近にいる」「私の身近には私を十分理解してくれる人がある」などの項目が高い負荷量を示していた。そこで[F2:身近な支援]と命名した。第3因子は3項目で構成されており、「実習でしかできない経験を積極的にしたい」「実習に向けて、事前学習をしている時にやりがいを感じる」などの項目が高い負荷量を示していた。そこで、[F3:目的目標の意識]と命名した。

各下位尺度の信頼性係数の推定値としてCronbach's α/ω を求めた。それぞれの α 係数/ ω 係数は、「F1:精神的な切迫」が.78/.84、「F2:身近な支援」が.85/.86、「F3:目的目標の意識」が.64/.65であった。

実習前適応感尺度の下位尺度に相当する項目の平均値と標準偏差は「F1:精神的な切迫」($M=3.57$, $SD=0.83$)、「F2:身近な支援」($M=3.54$, $SD=0.97$)、「F3:目的目標の意識」($M=3.35$, $SD=0.76$)であった。なお、項目平均点は尺度得点とし、以降の分析に用いた。

実習前適応感尺度の基準関連妥当性を検討するため、自己効力感尺度とCES-Dを用いた。相関係数を算出した結果、全てに有意な相関が認められた(Table 2)。

実習前適応感に影響する要因

抑うつ症状と実習前適応感との関連 学生の抑うつ症状についてはCES-Dを用いた。その結果357人中285名(約80%)がカットオフ値の16点以上であり、学生は実習前から抑うつ症状が高かった。

学生の実習前適応感と抑うつ症状の有無の関連に

Table 1 実習前適応感尺度の因子分析における因子負荷量と因子間相関

項目	M	SD	F1	F2	F3	<i>h</i> ²
F1：精神的な切迫 ($\alpha = .78, \omega = .84$)						
08 実習のことを考えると精神的に余裕がなくなる	3.79	1.18	.79	.00	-.08	.64
03 実習がととても不安である	4.41	0.94	.67	.03	.24	.49
07 実習のことを考えると寝つきが悪くなる	2.98	1.45	.59	-.03	-.16	.39
12 実習場の看護師との関係を築くことが非常に不安である	3.85	1.14	.58	-.03	.07	.34
09 普段より体調がすぐれないように感じる	3.01	1.33	.53	-.02	-.20	.34
13 患者との関係を築くことが不安である	3.37	1.23	.50	-.04	.13	.27
F2：身近な支援 ($\alpha = .85, \omega = .86$)						
16 頼れる人が身近にいる	3.71	1.11	.04	.89	-.02	.78
17 私の身近には私を十分理解してくれる人がいる	3.71	1.14	-.01	.87	-.01	.76
18 サポートが欲しい時に十分なサポートが受けられている	3.21	1.07	-.09	.63	.10	.48
F3：目的目標の意識 ($\alpha = .64, \omega = .65$)						
06 実習でしかできない経験を積極的にしたい	3.89	0.97	-.03	-.02	.67	.44
01 実習に向けて、事前学習をしている時にやりがいを感じる	2.91	1.08	-.02	.05	.57	.35
05 学内演習で学んだ看護技術を、実習で実践できるよう準備している	3.26	0.94	.07	.06	.53	.31
因子間相関						
			F1			
			F2	-.19		
			F3	-.05	.29	
残余項目						
02 実習で楽しみにしていることがある	2.41	1.12				
04 実習の事前課題がととても負担である	3.70	1.18				
10 孤独感がある	2.54	1.30				
11 実習指導担当教員とうまくコミュニケーションがとれている	3.06	1.14				
14 実習グループメンバーとうまくコミュニケーションがとれている	3.58	1.06				
15 十分にリラックスできる時間がもてている	2.26	1.13				

Table 2 実習前適応感・自己効力感・CES-Dの相関

	実習前適応感		
	精神的な切迫	身近な支援	目的目標の意識
自己効力感			
対象の理解・援助効力感	-.33**	.27**	.32**
友人との関係性の維持効力感	-.28**	.56**	.27**
指導者との関係性の維持・学習姿勢効力感	-.49**	.29**	.39**
CES-D	.62**	-.36**	-.22**

***p* < .01

ついて検討するため、実習前適応感の〔F1：精神的な切迫〕〔F2：身近な支援〕〔F3：目的目標の意識〕を従属変数、CES-D16点以上〈CES-D高群〉、CES-15点以下〈CES-D低群〉を独立変数とした対応のない *t* 検定を行った (Table 3)。その結果、〔F1：精神的な切迫〕においては、CES-D高群のほうが低群より有意に平均値が高いことが示された (*t* (355) = 9.24, *p* < .00, *d* = 0.13)。〔F2：身近な支援〕においては、CES-D低群のほうが高群より有意に平均値が高いことが

示された (*t* (117) = 5.01, *p* < .00, *d* = 0.12)。〔F3：目的目標の意識〕においては、CES-D低群のほうが高群より有意に平均値が高いことが示された (*t* (112) = 3.09, *p* < .00, *d* = 0.10)。

実習の重要性と実習前適応感との関連 学生の実習前適応感と学生が抱く実習の重要性の関連について検討するため、実習前適応感の〔F1：精神的な切迫〕〔F2：身近な支援〕〔F3：目的目標の意識〕を従属変数、実習についての重要さの思い〈全く重要と思わ

Table 3 抑うつ症状と実習前適応感との関連

	CES-D 高群 n=285		CES-D 低群 n=72		t	d
	M	SD	M	SD		
F1: 精神的な切迫	3.75	0.76	2.84	0.71	9.24**	0.13
F2: 身近な支援	3.42	0.96	4.01	0.88	5.01**	0.12
F3: 目的目標の意識	3.29	0.76	3.59	0.73	3.09**	0.10

** $p < .01$

Table 4 学生が抱く実習の重要性と実習前適応感との関連

	1: 全く重要と思わない/あまり重要と思わない/やや重要と思う n=28		2: ある程度重要と思う n=89		3: とても重要と思う n=240		F	多重比較	η^2
	M	SD	M	SD	M	SD			
F1: 精神的な切迫	3.69	0.89	3.53	0.88	3.57	0.81	0.40	n.s.	0.00
F2: 身近な支援	3.21	1.29	3.31	0.92	3.67	0.93	6.14	**	2<3, 1<3
F3: 目的目標の意識	2.61	0.80	3.00	0.72	3.57	0.67	40.39	**	1<3, 2<3, 1<2

** $p < .01$

ない/あまり重要と思わない/やや重要と思う)〈ある程度重要と思う)〈とても重要と思う)を独立変数とした1要因分散分析を行った(Table 4)。その結果, [F1: 精神的な切迫]においては, 重要性の程度において有意な差が認められなかった($F(2, 354)=0.40$, $p < .67$, $\eta^2=0.00$)。[F2: 身近な支援]においては有意な差が認められ($F(2, 354)=6.14$, $p < .00$, $\eta^2=0.03$), 多重比較(Shaffer法, 5%水準)を行ったところ, 〈とても重要と思う)が〈ある程度重要と思う)〈全く重要と思わない/あまり重要と思わない/やや重要と思う)より有意に平均値が高いことが示された。[F3: 目的目標の意識]においては有意な差が認められ($F(2, 354)=40.39$, $p < .00$, $\eta^2=0.19$), 多重比較(Shaffer法, 5%水準)を行ったところ, 〈とても重要と思う)が〈全く重要と思わない/あまり重要と思わない/やや重要と思う)〈ある程度重要と思う)より, 〈ある程度重要と思う)が〈全く重要と思わない/あまり重要と思わない/やや重要と思う)より有意に平均値が高いことが示された。

実習期間と実習前適応感との関連 学生の実習前適応感と3つの実習期間の関連について検討するため, 実習前適応感の[F1: 精神的な切迫][F2: 身近な支援][F3: 目的目標の意識]を従属変数, 実習期

間〈1週間〉〈2週間〉〈3週間以上〉を独立変数とした1要因分散分析を行った(Table 5)。その結果, [F1: 精神的な切迫][F2: 身近な支援]においては, 3つの期間において有意な差が認められなかった($F(2, 354)=0.38$, $p < .68$, $\eta^2=0.00$; $F(2, 354)=1.71$, $p < .18$, $\eta^2=0.01$)。[F3: 目的目標の意識]においては有意な差が認められ($F(2, 354)=4.59$, $p < .01$, $\eta^2=0.03$), 多重比較(Shaffer法, 5%水準)を行ったところ, 〈1週間〉が〈2週間〉〈3週間以上〉より有意に平均値が高いことが示された。

実習領域と実習前適応感との関連 学生の実習前適応感と実習領域の関連について検討するため, 実習前適応感の[F1: 精神的な切迫][F2: 身近な支援][F3: 目的目標の意識]を従属変数, 実習領域〈基礎実習〉〈領域実習〉〈統合実習〉を独立変数とした1要因分散分析を行った(Table 6)。その結果, [F1: 精神的な切迫]においては有意な差が認められ($F(2, 354)=7.80$, $p < .00$, $\eta^2=0.04$), 多重比較(Shaffer法, 5%水準)を行ったところ, 〈基礎実習〉が〈領域実習〉〈統合実習〉より有意に平均値が高いことが示された。[F2: 身近な支援]においては, 3つの実習において有意な差が認められなかった($F(2, 354)=0.69$, $p < .50$, $\eta^2=0.00$)。[F3: 目的目標の意

Table 5 実習期間と実習前適応感との関連

	1：1 週間 n=29		2：2 週間 n=94		3：3 週間以上 n=234		F	多重比較	η^2
	M	SD	M	SD	M	SD			
F1：精神的な切迫	3.67	0.77	3.60	0.83	3.54	0.84	0.38	n.s.	0.00
F2：身近な支援	3.84	0.77	3.57	1.05	3.49	0.96	1.71	n.s.	0.01
F3：目的目標の意識	3.76	0.74	3.33	0.77	3.31	0.75	4.59	**	1>3, 1>2

** $p < .01$

Table 6 実習領域と実習前適応感との関連

	1：基礎実習 n=158		2：領域実習 n=132		3：統合実習 n=67		F	多重比較	η^2
	M	SD	M	SD	M	SD			
F1：精神的な切迫	3.75	0.78	3.48	0.84	3.31	0.85	7.80	**	1>3, 1>2
F2：身近な支援	3.58	1.00	3.46	0.97	3.61	0.92	0.69	n.s.	0.00
F3：目的目標の意識	3.53	0.71	3.28	0.81	3.09	0.70	9.03	**	1>3, 1>2

** $p < .01$

識]においては有意な差が認められ ($F(2, 354) = 9.03, p < .00, \eta^2 = 0.05$), 多重比較 (Shaffer 法, 5% 水準) を行ったところ, 〈基礎実習〉が〈領域実習〉〈統合実習〉より有意に平均値が高いことが示された。

考 察

実習前適応感尺度の信頼性・妥当性

学生の実習前適応感尺度の項目作成は, 実習を経験した学生, 実習指導経験を有する看護師と大学教員, 心理計量学を専門とし質的調査の経験を有する大学教員が合議の上, 概念と項目内容の整合性を確認しており, 尺度の構成概念妥当性は担保されていると考えられる。

実習前適応感尺度については, 探索的因子分析の結果から単純構造を満たしていた。また, 各因子に対する負荷量は高く, 概念のより核となる部分は測定できていること, 尺度の項目の内容は実習適応感の操作的定義から外れていないことから, 妥当性に関しては一定程度の質は担保できていると考えられる。尺度の信頼性については, [F3：目的目標の意識]の α 係数/ ω 係数が必ずしも十分な値ではなかったが, 項目数が少ないことを考慮すると許容できると判断した。

実習前適応感尺度の基準関連妥当性を検討するた

め, 自己効力感尺度と CES-D を用いた。実習前適応感尺度の [F1：精神的な切迫] について自己効力感尺度の [指導者との関係性の維持・学習姿勢効力感] と中程度の相関, [F2：身近な支援] について自己効力感尺度の [友人との関係性の維持効力感] と中程度の相関が認められたことから, 学生の実習前における適応感は他者との関係性が良いほど実習前の適応感が高くなることが示唆された。実習前適応感尺度の [F1：精神的な切迫] について CES-D と中程度の相関が認められたことから, 学生の実習前における適応感は, 学生の抑うつ症状がみられない学生ほど実習前の適応感が高くなることが示唆された。実習前適応感尺度の [F3：目的目標の意識] は自己効力感尺度・CES-D 共に弱い相関であったことは, 実習は必須科目であり, 定められた枠組みの中で実習を行い自由がきかない側面もあるように (巽, 2020), 目的目標を意識するというよりは, 課せられた課題をこなす側面が大きいとも考えられる。

以上から, 一部相関が小さいところもあったが全てに相関が認められ, 実習前適応感尺度の妥当性に関しては一定程度の質は担保できていると確認された。

実習前適応感に影響する要因

抑うつ症状と実習前適応感との関連 実習前から約 80% の学生に抑うつ症状がみられていたこと,

CES-D 高群のほうが低群学生より精神的な切迫であることが示唆されたことから、学生にとって実習は臨地に行く一定期間前から実習のことを考えはじめ、精神面が不安定になっている。抑うつ症状について、学生自ら気づき対処行動をとれていればよいが、CES-D 低群のほうが高群学生より身近な支援を得られていることから、CES-D 高群学生は自ら支援を得ることも難しいと考えられる。実習前になれば特に実習担当教員が学生と接する機会が多くなるため、その時に学習面の支援だけでなく精神面にも注意し接していくことで、適応感の低い学生の早期発見につながると考えられる。また、龔他(2019)は学生の教員への安心感が実習適応感に関係し、対象は異なるが中井・庄司(2008)は中学生の教師に対する信頼感の中でも安心感が学校適応感に最も影響していると示唆していることから、教員は学生にとって安心できる存在であることも重要であろう。

CES-D 高群より低群学生のほうが実習前から目的目標を意識し準備していることが示唆された。抑うつ症状が原因で学生が実習の目的目標を持たなくなることは、実習での貴重な学びに影響する。実習が始まるとさらに余裕が持たなくなるため、特に抑うつ症状が出現している学生に関しては、精神面の支援を優先することも重要であると考えられる。

実習の重要性と実習前適応感との関連 学生が抱く実習の重要性に関しては、実習を〈ある程度重要と思う〉〈とても重要と思う〉が329名(約90%)であったことから、大多数の学生は実習が重要と認識していることが示唆された。その中でも、実習を重要と強く思っている学生ほど支援を得られていることが示唆された。このような支援はすぐに得られるものではない。したがって、入学時から学生への支援体制を充実させる必要があるだろう。学生の立場に立てばこの時は友達、この時は教員のように事前に何時・誰に・どのような支援が欲しいのかを、学生自身が考えて行動することも必要であろう。また、実習を重要と強く思っている学生ほど実習前から目的目標を抱えていることが示唆された。Cowen et al.(2018)が学生は実習で新しい技術を学ぶことに興味があると示唆していることから、教員は学生の期待に応えられるような支援も必要であると考えられる。

実習期間と実習前適応感との関連 学生は実習中の期間が短いほど、実習の目的目標を意識している

ことが示唆された。学生にとっては実習中の期間が長いほど、実習の目的目標を意識するより、これから始まる長い期間の実習をどう乗り切っていくかに意識が向いている可能性がある。カリキュラム上、現実的に実習期間をコントロールすることは難しいが、学生の実習適応感の観点から考えれば、実習期間に応じた実習前オリエンテーションの工夫など、教員側の関わり方を検討する必要がある。

実習領域と実習前適応感との関連 学生は実習領域の中でも特に基礎実習において実習前から精神的に切迫していることが示唆された。このことは、初期に行われる実習について学生の心理的苦痛は大きい(Watson et al., 2009)と同様の結果であることから、実習前も学びの進度や実習経験が関係していると考えられる。基礎実習の内容は他の実習領域と比べ、基礎的であり、評価基準も高くないが、学生にとっては実習前から余裕がない状況である。教員はこの状況を把握したうえで支援していくことも必要であろう。また、目的目標の意識においては、基礎実習は他の実習領域と比べ高く抱えていることが示唆された。このことは、基礎実習に行く学生は実習自体が未知であることから、事前にできる準備は念入りにしているのではないかと考えられる。具体的な内容までは本研究で調査できていないが、目的目標の意識の項目内容から領域実習に行く学生は基礎実習の経験、統合実習に行く学生は基礎実習と領域実習の積み重ねられた経験が、実習前に何を予習すれば良いのかがイメージでき、あえて目的目標を重要視していないとも考えられる。

本研究の限界と課題

本研究の限界として、COVID-19の影響により調査の実施が難しく、調査対象者数が十分ではなかったこと、実習適応感尺度の信頼性・妥当性の検討に関しても検討の余地があることから、本尺度を一般化するまでには至っていない。よって、今後は調査対象者数を増やし、本尺度の有効性を検証すること、実習中の適応感と実習前の適応感との関連を含めて経時的に検討することが課題である。

引用文献

Bakker, E. J., Verhaegh, K. J., Kox, J. H., van der Beek, A. J., Boot, C. R., Roelofs, P. D., & Francke, A. L. (2019).

- Late dropout from nursing education: An interview study of nursing students' experiences and reasons. *Nurse Education in Practice*, 39, 17-25. <https://doi.org/10.1016/j.nepr.2019.07.005>
- Chan, A. W., Tang, F. W., Choi, K. C., Liu, T., & Taylor-Piliae, R. E. (2018). Clinical learning experiences of nursing students using an innovative clinical partnership model: A non-randomized controlled trial. *Nurse education today*, 68, 121-127. <https://doi.org/10.1016/j.nedt.2018.06.001>
- Chan, D. S. (2001). Combining qualitative and quantitative methods in assessing hospital learning environments. *International journal of nursing studies*, 38, 447-459. [https://doi.org/10.1016/S0020-7489\(00\)00082-1](https://doi.org/10.1016/S0020-7489(00)00082-1)
- Clarke, P., Sheffield, D., & Akehurst, S. (2015). The yips in sport: A systematic review. *International Review of Sport and Exercise Psychology*, 8, 156-184. <https://doi.org/10.1080/1750984X.2015.1052088>
- Cowen, K. J., Hubbard, L. J., & Hancock, D. C. (2018). Expectations and experiences of nursing students in clinical courses: A descriptive study. *Nurse education today*, 67, 15-20. <https://doi.org/10.1016/j.nedt.2018.04.024>
- 香川 秀太・茂呂 雄二 (2006). 看護学生の状況間移動に伴う「異なる時間の流れ」の経験と生成——校内学習から院内実習への移動と学習過程の状況論的分析——教育心理学研究, 54, 346-360. https://doi.org/10.5926/jjep1953.54.3_346
- 龔 恵芳・脇田 貴文・竹田 千佐子 (2019). 看護学臨地実習における指導者が看護学生の実習適応感に与える影響——教員および実習指導者との信頼感に着目して——関西大学心理学研究, 10, 19-31.
- 龔 恵芳 (2020). 看護学生の实習適応感に影響する要因の検討 応用心理学研究, 46, 11-21. https://doi.org/10.24651/oushinken.46.1_11
- 厚生労働省 (2011). 看護教育の内容と方法に関する検討会報告書 2011年2月28日 <http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r9852000001310q.html> (2022/12/02)
- 厚生労働省 (2022). 看護師等学校養成所入学状況及び卒業生就業状況調査 <https://www.mhlw.go.jp/toukei/list/100-1.html> (2022/12/15)
- Lee, J. J., Clarke, C. L., & Carson, M. N. (2018). Nursing students' learning dynamics and influencing factors in clinical contexts. *Nurse education in practice*, 29, 103-109. <https://doi.org/10.1016/j.nepr.2017.12.003>
- 眞鍋 えみ子・笹川 寿美・松田 かつお・北島 謙吾・園田 悦代・種池 礼子・上野 範子 (2007). 看護学生の臨地実習自己効力感尺度の開発とその信頼性・妥当性の検討 日本看護研究学会雑誌, 30, 243-253. <https://doi.org/10.15065/jjsnr.20070309003>
- 中井 大介・庄司 一子 (2008). 中学生の教師に対する信頼感と学校適応感との関連 発達心理学研究, 19, 57-68. <https://doi.org/10.11201/jjdp.19.57>
- 大久保 智生・青柳 肇 (2003). 大学生用適応感尺度の作成の試み—個人・環境の適合性の視点から パーソナリティ研究, 12, 38-39. <https://doi.org/10.2132/personality.2003.38>
- 大久保 智生 (2005). 青年の学校への適応感とその規定要因—青年用適応感尺度の作成と学校別の検討 教育心理学研究, 53, 307-319. https://doi.org/10.5926/jjep1953.53.3_307
- 櫻井 美奈・中原 りり子・岸田 泰子・荒木 亜紀・西崎 未和 (2018). 看護系大学生の領域別実習における不安、達成感、自己効力感の関連 共立女子大学看護学雑誌, 5, 7-15.
- 島 悟・鹿野 達男・北村 俊則・浅井 昌弘 (1985). 新しい抑うつ性自己評価尺度について 精神医学, 27, 717-723.
- Sun, F. K., Long, A., Tseng, Y. S., Huang, H. M., You, J. H., & Chiang, C. Y. (2016). Undergraduate student nurses' lived experiences of anxiety during their first clinical practicum: A phenomenological study. *Nurse education today*, 37, 21-26. <https://doi.org/10.1016/j.nedt.2015.11.001>
- 高橋 ゆかり・柴田 和恵・鹿村 眞理子 (2006a). 看護学生の实習適応感に関する研究 (第1報) ——尺度作成の試みと信頼性・妥当性の検討——群馬パース大学紀要, 2, 233-242.
- 高橋 ゆかり・柴田 和恵・鹿村 眞理子 (2006b). 看護学生の实習適応感に関する研究 (第3報) ——実習適応感に影響を与える要因の分析——群馬パース大学紀要, 2, 255-262.
- 高下 梓・山下 照美・奥原 香織・増沢 景子・杉浦 恵子 (2018). 看護学生の不安・悩み・ストレスに関する実態調査 松本短期大学研究紀要, 27, 31-38.
- 谷井 淳一・上地 安昭 (1994). 高校生の学校適応感と彼らの親の自己評定に基づく親役割行動の関係 教育心理学研究, 42, 185-192. https://doi.org/10.5926/jjep1953.42.2_185
- Tung, Y. J., Lo, K. K., Ho, R. C., & Tam, W. S. W. (2018). Prevalence of depression among nursing students: a systematic review and meta-analysis. *Nurse education today*, 63, 119-129. <https://doi.org/10.1016/j.nedt.2018.01.009>
- Warne, T., Johansson, U. B., Papastavrou, E., Tichelaar, E., Tomietto, M., Van den Bossche, K., Vizcaya-Moreno, M. F., & Saarikoski, M. (2010). An exploration of the clinical learning experience of nursing students in nine European countries. *Nurse education today*, 30, 809-815. <https://doi.org/10.1016/j.nedt.2010.01.009>

t.2010.03.003

Watson, R., Gardiner, E., Hogston, R., Gibson, H., Stimpson, A., Wrate, R., & Deary, I. (2009). A longitudinal study of stress and psychological distress in nurses and nursing students. *Journal of Clinical Nursing*, 18, 270-278. <https://doi.org/10.1111/j.1365-2702.2008.02555.x>

吉永 喜久恵・大沢 正子・高橋 光(1989). 看護学生の自

我同一性と実習適応感 神戸市立看護短期大学紀要, 8, 67-80.

財津 倫子・吉村 匠平・秋本 慶子(2019). 看護学生の認知や感情に焦点をあてた臨地実習適応感の検討日本看護学教育学会誌, 28, 39-45. https://doi.org/10.51035/jane.28.2_39

(受稿: 2023.2.13; 受理: 2023.7.12)
